

# ヨハン・ヨアヒム・クリストフ・ボーデと 18世紀のフライマウレライ

Johann Joachim Christoph Bode und Freimaurerei des 18. Jahrhunderts

野口 健\*

Takeshi NOGUCHI

## 1. 緒言

およそ18世紀のドイツ文学を考える上で、秘められたる当時の時代背景というものが随所に暗示されているということの重要性は、当時の作品を読み解く上で、さまざまな興味を喚起する。そうした時代の底流として無視することのできない問題に、当時の歴史背景と密接に結びついた秘密結社の関わり合いがある。

18世紀に新たに生まれた教養階層であるBürger達は、中産階級としての脆弱な社会的地位を固めようと、啓蒙主義というスローガンを掲げつつ、旧来の伝統に聖化された君主制と、宗教的権威の禁忌の呪縛から人間の理性を解放する原動力たらんとしたが、その理念は彼ら知識階級の頭の中での理想、つまり学の一部に過ぎず、しょせんは机上の空論に過ぎないはずであった。しかし、歴史はすでに動き始めていた。ヨーロッパ史上まれに見る短期間で極端とも言える政治体制の発展を遂げようとする潮流が起こりつつあったと言える。即ち、18世紀における専制君主制から立憲君主制を経由し、政治的激動の時代へと入っていたのである。そのような中、当時のドイツを取り巻く列強諸国、つまりイギリス、フランス、オーストリアは、植民地戦争の只中にあり、それらの触手はドイツ領邦にも伸びつつあった。ヘッセン・カッセル方伯家は、イギリスのハノーファー朝を後ろ盾としてドイツでの勢力拡大を狙っていた可能性があると考えられる。1738年にはハンブルクにイギリス大ロージェの支部が作られていることを考慮すれば、明らかにドイツのフライマウレライを牛耳ることのできるポジションを意識していたことは想像に難くない。現に、ヘッセン・カッセル方伯カールはStrikte Observanz（厳格戒律派）の中心がヴァイマルに移ろうとする時に難色を示したことからも、彼はフライマウレライを用いて、ドイツでの政治的影響力を強めようとしていたと思われる。また、ヨーゼフ二世は、大ドイツ主義の下にドイツの領土を蚕食する機会を窺っていたと考えられる。一方、オーストリアからシュレージエンを奪取した新興勢力のプロイセンはドイツ領邦の統率と覇権を制する好機を狙っていた。フライマウレライ嫌いであったフリードリヒ二世にとっても、諜報活動という点からフライマウレライのネットワークは有効であったと思われる。彼は「3つの地球儀」の支部をドイツ領邦の中に進出させたかったことであろう。（実際はそれが難しかったために、逆に1766年にStrikte Observanzに所属したのだと思われる。）そのような状況下において、自主独立を守ろうとするドイツ領邦の貴族や教養市民達は、自分達の政治観や政治哲学をシミュレートすることができる裏社会を提供してくれる新しいフライマウレライを求めていたと思われる。例えば、Strikte Observanzなどは、その最たるものと言えよう。

18世紀後半のフライマウレライは、やり方次第では、当時、実力をつけつつあった教養市民達の地

---

\*本学部非常勤講師

位の確立と自由への要求を、疑似体験的に満足させるための装置の役割を担うことができた。つまり、結社というクラブの中に、実社会とは一線を画する空想上の理想社会を作り、自分達の夢を秘密結社という平等社会の中でシミュレートし、また、未来の社会のありようについて、その社会を構成する単位となる人間の根本的な在り方について、語り合う場となり得るものだった。つまり、人間と国のあり方についての人道主義的理想を求めることができたわけである。その意味では、イギリスの石工の徒弟制度に基づく従来のフライマウレイという組織が掲げる人道主義的道德観はドイツにおけるモダンフライマウレイにも、しっかりと根を下ろしていた。しかし、新大陸アメリカの開拓と独立革命の成功が彼らを空想上の世界から現実の世界へと少なからず引き戻したと思われる。彼らにとってアメリカの動静に敏感にならざるを得ないほど、ドイツ領邦国家の不統一な形態と放恣的に開拓が行われて、あちこちに街や村ができていくアメリカの状況は少なからず似ていたのだろう。アメリカでは確実に彼らの理想とする社会が前進しつつあったことを知るにつけ、理想は一挙に実現性を持って意識されるようになっていったのである。夢は実現できると思う啓蒙主義者達は、当時の理想郷に対する憧憬も手伝って、自分達の理想社会を現実を試みる可能性について模索するようになっていったが、その根底には自由・平等・博愛といったドイツ教養文化の根本とも言うべき精神が脈打っている。ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832) の「ヴィルヘルム・マイスター」などは、少なからずこういった風潮が反映されている例と言える。このように、単なるクラブから本格的な政治結社へと脱皮していくことによってドイツフライマウレイは上位階構造を備え、秘密結社としての性格を強めていく。つまり、結社としての秘密を守るガードが上層部において堅くなっていくわけである。しかしながら、閉ざされたフライマウレイという社会は、また同時に、世界市民という開かれた理念に基づく、国際的・人的ネットワークを形成していた。そこにはありとあらゆる情報が飛び交っていた。情報を得ることも可能であったし、自ら情報を発信することもできた。このためBürger達による多岐に渡る問題に対する真剣な討論の場であると同時に、詐欺師達が横行する場でもあった。その際、彼らは、交霊術、錬金術、その他の反啓蒙主義的思想を当時の科学と結びつけ、もっともらしいことを言うのが常であった。フライマウレイを自称する潜りの秘密結社は無数にできていたので、この世界は当時、混沌を極めていたのも事実である。クニッゲ男爵 (Adolf Freiherr von Knigge)<sup>1</sup>は「人間交際論 (Über den Umgang mit Menschen)」の中で次のように言っている。「今日ではどのような身分の者であれ、少なくとも一時はこのような秘密 (geheim) の同盟の構成員とならなかつたような人間と出会うことはまずない。」当時の「geheim」という修飾語は絶対主義における「公共 (Öffentlichkeit)」に対する対義語、つまり「私的な」という意味に過ぎないという説もあるほど、秘密の名に値しない一般性を持っていたとも言える。だからこそ上位階構造が求められたのであろう。ゲーテ自身、アマリア・ロージェ (die Loge Amalia, zu den drei Rosen) の責任者であった大臣フリツチュ (Jakob Friedrich von Fritsch)<sup>2</sup>に1780年2月13日付けの手紙で加入を申請しているが、加入申請の理由は、社交上、フライマウレイに加入しているという肩書きがどうしても必要だということだった。しかし真実のところはカール・アウグスト (Karl August) 公<sup>3</sup>の意思だった。フリツチュはボーデにゲーテを紹介した人である。そしてゲーテはボーデからフライマウレイの知識を詳細に渡り知ることになった。ゲーテのフライマウレイ (Strikte Observanzなのだが) への参入儀礼の立会人はフリツチュとボーデだった。この組織は、ドイツの文学、政治に大きな影響を及ぼす存在だった。玉石混交と言えども、新時代を担う人間と社会のあり方を真剣に模索する者達がそこにはいたからである。そのような中で、18世紀ドイツにおいてフライマウレイの組織構造を踏襲し、独自の成長を遂げたフライマウレイの亜流がある。Strikte Observanz (厳格戒律派:1743-1782) と Illuminatenorden (啓明結社: 歴史上は1776-1785 [1785年以降も、ボーデの死の1793年まで続く]) がそれである。

まず始めにStrikte Observanzが発生し、その後、発生したIlluminatenordenが、後に空中分解する

Strikte Observanzの受け皿となる形で発展した。そして、自らもハンブルクで、イギリス本国の大ロージェの流れを汲む本家のフライマウラーの一員となりながら、ドイツで発展していく、この二つの秘密結社に深く関わり、その秘密結社を社会改革運動の発信基地として発展させようと努め、なおかつ、その理念を、主にヴァイマルを中心とした文人、政治家に伝えた18世紀ドイツフライマウレライ解明のキーマンとも言えるヨハン・ヨアヒム・クリストフ・ボーデ (Johann Joachim Christoph Bode, 1730-1793) の生涯を紹介すると同時に、彼の業績について述べたい。これほど文学に対する深い造詣を持ち、なおかつフライマウレライを通じて当時の政治情勢に深く関わった人間であるにもかかわらず、彼の活動とその重要性については、まだあまり周知されていないようである。しかし、彼の体験を通して、語り尽くされてきたと思われる18世紀ドイツ文学に別の視点を与えることは可能であろうし、何よりも荒唐無稽の迷路に陥りやすいドイツのフライマウレライ研究が政治という面からボーデの中で1本の線となり得る可能性を見出すことをめざしたい。本論文においては、各論的な深化の前段階としての18世紀のドイツフライマウレライの全体像を彼の人生を通して浮き彫りにすることを目的とする。

## 2. ボーデのブラウンシュヴァイク及びハンブルク時代

ボーデは1730年1月12日に日雇い兵士の息子としてブラウンシュヴァイク (Braunschweig) のバルム (Barum) で生まれた。この貧しい生い立ちが社会改革を目指す精神を培う原点になっていると思われる。お世辞にも良いとは言えない彼の教育環境にあって、彼に初めて文化的薫陶の機会を与えたのは母親であった。彼女は我が子に音楽的才能を認め、1745年、彼が14歳の時から音楽教育を受けさせ、1750年には彼はブラウンシュヴァイクの音楽隊のオーボエ奏者になる。ちょうどこの時期より、学究的な世界にも興味を示し始め、フランス語と英語を学び始める。これが彼を後に有名な翻訳家にする下地となるのである。

彼は、1757年にブラウンシュヴァイクからハンブルクに移ってからは、新聞の編集や翻訳の仕事をはじめた。1763年から64年にかけて、*„Der Hamburg Correspondent“* の編集を指揮し、1766年には彼の手元に残された妻の遺産を元手に出版社兼印刷業も平行して営み始める。この妻の遺産がなければ、彼はここまで名を残すことはできなかったと思われる。彼は劇のちらし、楽譜、さらには革新的な神学者であるバールト (Karl Friedrich Bahrtd)<sup>4</sup>の多くの仕事を印刷、出版していた。また、他の出版社の依頼の仕事も受け入れていて、有名などころではニコライ (Friedrich Nicolai)<sup>5</sup>の仕事も請け負っていた。このような時期にレッシング (Gotthold Ephraim Lessing, 1729-1781) と知り合う。レッシングもしばらくの間、彼の経営に共に携わっていて、有名なのは、*„Buchhandlung der Gelehrten“* における両者の協力が挙げられる。これは許されざる海賊版に対する防御のために著者達が作った一種の自費出版組織であった。当時はまだ現代における著作権保護といった考え方はなく、海賊版に対する歯止めがなかったのである。ゲルステンベルク (Heinrich Wilhelm von Gerstenberg) やバセドー (Johann Bernhard Basedow) やクロップシュトック (Klopstock)、当然のことながらレッシングの作品も出版された。レッシングの「ハンブルク演劇論 (Hamburgische Dramaturgie, 1767-68)」やゲーテの「*Götz von Berliingen mit der eisernen Hand*」やクロップシュトックの「*Ode*」はボーデの元から出版された。さらにマティアス・クラウディウス (Matthias Claudius)<sup>6</sup>が出版した「*Wandsbecker Bote*」に発行者・編集者、また著者としても関わり、この活動がボーデをしてその名を帝国全土に知らしめることになる。ボーデは後に著名な翻訳家となって1768年にローレンス・スターン (Laurence Sterne) の「*センチメンタルジャーニー (A Sentimental Journey through France and Italy by Mr. Yorick: 独題Yoricks empfindsame Reise durch Frankreich und Italien, 出版ハンブルク)*」をドイツ語に翻訳し、当時のドイツ文学界にその名を知ら

れるところとなる。この点で特に注目すべきは、仕事仲間でもあったレッシングの提案もあって「センチメンタル (sentimental)」という英語に「emphindsam」というドイツ語を初めてあてて、ドイツにおける感傷文学の確立に寄与したことである。これによって感傷文学の時代はemphindsamの名前を持つことになった。ボーデは、これを皮切りに、矢継ぎ早にイギリスの著名な作品を翻訳していく。ここに有名なものを紹介すると、1774年にローレンス・スターン (Laurence Sterne) の„Tristram Shandy (独題Tristram Shandis Leben und Meinungen、出版ハンプルク)、1776年にオリバー・ゴールドスミス (Oliver Goldsmith) の„The Vicar of Wakefield (独題Dorfprediger von WakefieldまたはDer Vicar von Wakefield、出版ライプツィヒ)“、1786年にヘンリー・フィールディング (Henry Fielding) の„Tom Jones (独題Die Geschichte des Thomas Jones, eines Findelkin、出版ライプツィヒ)“、さらに1793年にモンテーニュ (Michel de Montaigne) の「随想録」の中の„Gedanken und Meinungen über allerley Gegenstände“ (出版ベルリン) といったものが挙げられる。決して18世紀ドイツ文学における彼の影響は希薄なものではない。

このような表の顔に対する裏の顔を彼は持っていた。それはフライマウラーとしての顔であり、それこそ彼の真骨頂であった。彼は、1737年にドイツのハンプルクに初めて設立された、イギリス大ロージェ公認のロージェ「Absalom zu den drei Nesseln」に、1761年に入会する。彼は短い期間でマイスターの位にまで達し、Absalomロージェの秘書となった。ハンプルクにStrikte Observanzを導入したのは彼であった。1766年、彼はAbsalomロージェ全体の総代理人 (Procurator Generalis) として働いていて、この役職でInnerorden (Strikte Observanzの幹部組織) と従来の伝統的なロージェ双方の会計主任を務めていた。また、フライマウラーの警察庁の長として、結社内部の秩序維持にも世話を焼いたのであった。この業績ゆえにクニッゲ男爵は、彼に、後に厳格戒律派執事 (Faktotum der Strikten Observanz) という名誉階級を授与した。そして、この地位が彼に当時のStrikte Observanzを中心としてドイツフライマウレイの全容を見渡せるポジションを与え、且つまた当時の主要な結社員と交流を持つことを可能せしめたという点において極めて重要なのである。彼がフライマウラー通となっていくその元はここにあると言えよう。1760年代前半よりフランスからドイツのフライマウレイに流入してきた魔術的神秘的傾向を彼は快く思っていなかった。何故ならば彼はフライマウレイを通じて啓蒙主義的精神を人々の間に喚起し、格差の元凶である絶対主義を打破したかったからである。したがって、啓蒙主義運動の象徴だったジェスイティズム (Jesuitismus) の立場で彼はそれらと相対したのである。しかし、彼は決してカトリック教徒になるつもりはなかった。あくまでも啓蒙主義を貫くという一点においてジェスイティズムの立場を一時的にとったに過ぎないと思われる。何故ならば、国の中に国を作るとゲーテに言わしめたフライマウレイの構造は国家の枠を超えた神の国として当時のヨーロッパを席卷していたカトリックとは競合するものであり、ボーデの目指す共和制とカトリックとは相容れないものであったからである。

1766年にレッシングはピルモントで湯治療養中、メーザー (Justus Möser)<sup>7</sup>と知り合い、フライマウレイの語源的由来について語り合い、なおかつ、ボーデともフライマウレイの目的について討論し、レッシングは後に、この体験を元にして「エルンストとファルクの対話」という作品を仕上げている。レッシングは、1776年にも1771年にもボーデにAbsalomへの入会を依頼しているが、どちらも断られている。その理由は、レッシングが貴族の出身ではないということであった。しかし、一方で、ボーデ自身が父親が日雇い兵士で、その日暮らしにも事欠くような極貧の境遇であったにもかかわらずマイスターまで昇進した理由は、ボーデがフライマウレイにおける極秘の出版活動に貢献できたということにあったのではないかと推測できる。また、フライマウレイの活動を単なる精神的道徳活動としてではなく、社会を変革する力として見ているボーデにとっては、レッシングの「賢者ナータン (Nathan der Weise)」に見られるような誠実で純粋な性格が、政治結社の性格を強く帯びつつあり、博愛精神の裏で社会変革すら推し進めんとする可能性を秘めた、このロージェにはふさわしくないと

判断されたのではないかと考えられる。いずれにせよボーデのフライマウラー観は、綺麗事ではすまされない非情な側面を持っていたのである。彼は、ハンブルク時代に独立した結社の国家創設のための計画を遂行する地位にあった。およそフライマウレイとは彼にとって、そこから啓蒙主義を送り込み、絶対主義のシステムを克服するための手段なのであった。彼の貧しい辛い生い立ちが、彼をフライマウレイを通じての社会改革へと駆り立てていた。

1776年の早い時期に、ボーデは旅の途中でヴァイマルを訪ねている（この年はイルミナート結社が設立された年でもある）。ボーデはフライマウレイを通じて、ヴァイマルの大臣であるフリッチュや、参事官のシャルト (Ernst Karl Konstantin von Schardt)<sup>8</sup>、侍従のマーシャル (August Dietrich von Marschall)<sup>9</sup>といった有力者と知り合いだった。また、彼は、ゲーテ、ヴィーラント、レンツ、さらには侯爵秘書にして作家兼出版者であるベルトゥフ (Friedrich Justin Bertuch)<sup>10</sup>や、さらにはカール・アウグスト自身とも知り合いだった。つまり、ヴァイマルの有力者とのコネクションが強く、このことが2年後に彼のヴァイマルへの移住を決断させたと思われる。現時点では、まだはっきりわからないのだが、クニッゲ男爵とボーデがこの年、一緒にヴァイマルを訪れていた可能性もある。というのも、1776年にカール・アウグスト公は、ゲーテの提案でクニッゲ男爵 (フリードリヒ・ニコライの„Allgemeine deutsche Bibliothek“に79年から96年まで評論を書く) を自分の侍従 (Kammerherr) にしている。そしてボーデは、ベルンシュトフ (Bernstorff) 伯爵というデンマークの大臣の未亡人であり、彼が音楽を教えていたカリタス・エミリア・フォン・ベルンシュトフ (Charitas Emilia von Bernstorff) の頼みもあり、彼女の首脳陣の一人として付き従う形で1778年にヴァイマルに引越すことになる。その際、自分の事業を仕事仲間に売却し、生涯ヴァイマルに留まった。

### 3. ボーデのヴァイマル時代

ボーデがヴァイマルで暮らした15年という年月は、フライマウレイとイルミナート結社のための活動が彼の人生の中心になった。彼はさらに文学の翻訳者としても活動し、彼の最もすぐれた仕事のいくつかがここで成立している (前述のフィールディングの「トム・ジョーンズ」、オリバー・ゴルドスミス「ウェイクフィールドの牧師」、モンテニユの「随想録」の„Gedanken und Meinungen über allerley Gegenstände“) 。しかし、この時期の彼を特徴づけようと試みるならば、主にフライマウラーとイルミナートとして活動したと言えよう。当時、ヴァイマルの宮廷内にフライマウレイを導入していた中心人物であるフリッチュ大臣は、Strikte Observanzを導入しており、ここにボーデも深く関わっていくことになる。ここで、Strikte Observanzの歴史とアマリア・ロージェ成立のいきさつに関して簡単に述べたいと思う。

Strikte Observanzは18世紀ドイツにおけるフライマウレイで支配的地位を獲得していた流派である。オーバーラウジッツ (Oberlausitz) 出身のフント (Karl Gotthelf von Hund) 男爵によって1743年にその原形が作られ (参考: 44年にフリードリヒ大王が「3つの地球儀」というフライマウレイの支部をプロイセンに置く。=イギリスのロージェの支部)、1751年以降、拡大されていくが、この結社を設立したフント男爵の真の目的は、自分達の国土で自分達の民主主義を打ち立てる憲法によって、独立した貴族国家を実現することだった。弱小領邦諸侯にとっては、ドイツを狙う大国による蚕食を防ぐ苦肉の策としての共和制実現にむけての第一歩であった。この共存のためには、この機運を盛り上げていくための組織的な装置が必要だった。フント男爵はそれをテンプル騎士団<sup>11</sup>伝説とフライマウラーを結びつけることに求めた。従来のフライマウレイの位階制度である、徒弟 (Lehrling)・職人 (Geselle)・親方 (Meister) という身分の上に、さらに修正スコットランド儀礼<sup>12</sup>と称する上位階制度を置いた。そして自分達が上位階につくことで、貴族が職人達の徒弟制度であるフライマウレ

ライ的徒弟制度を支配する形式をまがいなりとも作った。つまり、外見上は貴族主導型のフライマウレライにしたわけである。ドイツでもテンブル騎士団にまつわる伝説と、スコットランドに対する憧憬の念が、一般に広がっていたし、知られざる上位者(陰のボス)がそこには存在しているという、実にロマンティックな概念が人々の空想的な好奇心を刺激したために、人気を博していくことになる。Strikte Observanz のシステムは、外部に対して厳格に閉鎖されていて、そのシステムに所属する伝統的な 3 つの位階のロージェの結社員達は、彼らに明かされていない上位階者に無条件に服従するという誓いを果たさなければならなかったが、これは今までのフライマウレライにはなかった事柄だった。前述したように、伝統的なフライマウラーの 3 つの位階の後に、いわゆるスコットランド位階、即ち、結社中枢 (Innerenorden) のための本来的準備段階の修鍊師 (Noviziat) が続き、その後にテンブル騎士の上位階が置かれる他、補助的位階がいくつか作られることもあったと言われている。結社員は Noviziat の段階で兜と甲冑を身にまとい、その上からテンブル騎士団の流儀に従った肩掛けをかけ、フライマウラー式の婉曲に言いまわされた刀礼 (Ritterschlag) を受け騎士名を授かった。そこでは意識的に中世のテンブル騎士団が模倣され、その組織構成とその結社のための地理を重んじた。フント男爵の目的は、この秘密裏に活動する結社を使って、Innerenorden (結社中枢) の指揮によって統治される秘密結社独自の独立した共和制国家を樹立することだったわけであるが、そのためには結社独自の企業や事業、並びに結社員の貢献が国家樹立のための領地獲得資金をもたらしてくれるようになっていた。当然のことながら新大陸アメリカへの移住者達の近況報告が結社員達に大きな影響を与えていた。新大陸開拓や楽園に対する憧憬も手伝って、結社員達は、領地として、カナダのラブラドルや、女帝カタリナから買い取ることを望んでいたロシア地方を思い浮かべていたと言われている。しかし、現行の政治体制の拒絶と、それに代わって自分達の国土で自分達の民主主義を打ち立てる憲法によって自分達を独立させるなどという目論見を、帝国も、個々の諸侯達も受け入れることはできなかったと思われる。そのような中、フント男爵の計画につけこむ詐欺師も後を絶たなかった。しかし皮肉にもフント男爵の Strikte Observanz は、つけこんでくる詐欺師達との対決に勝利することによって発展を遂げ、また、そうしたものに負けることによって活動を終結させることになっていく。つまり、常にこうした野心家達との闘ぎ合いがドイツフライマウレライの転換点を作っていくのである。1764 年にユダヤ人の詐欺師、本名はヨハン・ザムエル・ロイヒテ (Johann Samuel Leuchte) は、ヨーンゾン (Georg Friedrich von Johnson-Hünen) 男爵と自称して、当時、ヴァイマルの大臣フリッチュ達が関与していたイエナのロージェ Zu den drei Rosen で、ドイツ全土に広がるフライマウレライのロージェを支配しようとする野望を実行しつつあった。当時はプロイセン経由によるフライマウレライの進出は、弱小領邦領主にとってはプロイセンによる領邦の蚕食に繋がりがかねないものであったと思われる。このドイツ領邦諸侯とプロイセンとのフライマウレライを通じての闘ぎ合いの中、ヨーンゾンは領邦諸侯を取り込む新しい組織を確立したかった。どうもヨーンゾンは自らの組織に民兵組織を作りたかったらしい。(しかし、後にブルシェンシャフトを産み出すことになる、イエナ大学の血気盛んな学生達のことを考えれば、そうした民兵組織は政治的トラブルの火種になりかねない代物であった。) それは領邦諸侯にとって、プロイセンによるフライマウレライのイニシアティブを抑止することになり、ヨーンゾンにとっては、ドイツフライマウレライを牛耳る好機にもなったのである。彼はテンブル騎士団起源説に基づき、自ら作った高位階制度によってドイツフライマウレライを改革しようとした。手始めにクレルモン派を失脚させ、ついで同じテンブル騎士団起源説に基づく組織、Strikte Observanz に接近する。しかしこの詐欺行為をフント男爵がゴータのアルテンベルゲ (Altenberge) で開催されたフライマウラーの大会で告発し、未然に防いだ。興味深いことは、テンブル騎士団に基づく上位階組織作りをするヨーンゾンとフントの対決で勝者となったのはフントであったが、アルテンベルゲの大会に集まったフライマウラー達は、どちらにせよ上位階組織にテンブル騎士団に沿った儀礼を欲したとい

うことである。アルテンベルグの大会は、正当な Templar 騎士団の選択の場でもあったと言える。ヨーンズンは、終生ヴァルトブルク城に幽閉され、そこで獄死した。

この事件はフント男爵にとって災い転じて福となるの典型であった。これを契機に、大会に参加した全権大使らは、皆、Strikte Observanzへの信頼を表明し、そこへの所属を望んだのである。この混乱がきっかけでイエナのロージェは閉鎖され、1764年10月24日に新たにヴァイマルにStrikte Observanzのロージェが作られることになった。これが有名なアマーリア・ロージェ (die Loge Amalia, zu den drei Rosen) である。このロージェの開設にあたっては、翌日がKarl August公の母親であるAmaliaの誕生日だったため、このロージェ開設がプレゼントだったのではないかと思わせるタイミングである。以上がStrikte Observanzの1764年までの歴史と、1764年のアマーリア・ロージェ成立のおよその概略である。そして、Strikte ObservanzはAltenbergeの大会以後18年間で、ドイツで最も巨大で重要な高位階組織となっていく。

1764年10月24日に創立されたアマーリア・ロージェは、Strikte Observanzによって結実したが、ヴァイマルはその結社独自の地理に基づく地名としてはSubpriorat Dannebergと言われていた。これはチューリングェンを含むヴァイマルを表している。現存の結社員リストによれば1782年までに明らかに31人がInnerenordenに所属していた。ザクセン・ゴータの宮廷顧問官にしてアイゼナッハの宰相であるヨハン・ルートヴィヒ・フォン・ベヒトールスハイム (Johann Ludwig von Bechtolsheim) は、DannebergのGroßmeisterの役職を果たしていた。ヴァイマルのメンバーの最高責任者にして地域部長であるカール・フリードリヒ・フォン・リュンカー (Karl Friedrich von Lyncker) がSubpriorの肩書きを持った彼の代理人であった。大臣のvon Fritschは、Strikte Observanzの表現でいうところの、アマーリア・ロージェのMeister vom Stuhl (参入儀礼をしきり執り行う重要な位階)、すなわち上級騎士修道会員 (Hauskomtur) であった。ゲーテとカール・アウグスト公は1782年の終わりまでにはInnerenordenに参入していた。Strikte Observanzにおけるゲーテの結社員名は今日まで知られていないが、カール・アウグスト公はRitter von weißen Falkenと名乗っていた。勿論、Innerenordenには、アマーリア・ロージェの兄弟達も所属していた。彼らは伝統的な3つの位階に手を加えたフント男爵のバージョン (Strikte Observanz) を採用していた。つまり、イギリスのメイソンの組織を包含する形で、新しいTemplar 騎士団起源説に基づく組織を採用したのである。しかし、アマーリア・ロージェの平会員には、Strikte Observanzに所属していない人達があった。特に、ベルトゥフ、詩人ムゼウス (Johann Karl August Musäus)<sup>13</sup>、ヴァイマルの侍医でゲーテと親交のあるローダー (Loder) 等を挙げることができる。ヴァイマルのアマーリア・ロージェはその創立の1764年から、1782年のヴィルヘルムスバートの大会 (Wilhelmsbader Freimaurerkonvent)<sup>14</sup>での空中分解に至るまで、Strikte Observanzのシステムに忠実であり続けた。1781年からは組織の首脳部がブラウンシュヴァイクからヴァイマルへ移動したことに伴い、結社経営によって金銭収入を得るようになった。しかし1782年という年はヴァイマルのフライマウレライにとって変革と激動の年であった。ヴィルヘルムスバートの大会での対決でフライマウレライのTemplar 騎士団起源説<sup>15</sup>と未知の上位者が否定される最終動議が採決されたことにより、従来のフント男爵のバージョンであるStrikte Observanzの上位階組織が機能しなくなったこと、結社ナンバーツーに昇進したヘッセン・カッセル方伯カール (Karl von Hessen-Kassel) の抗議<sup>16</sup> (彼はドイツフライマウレライの主導権を取りたかったのでヴァイマルにその権利を奪われなくなかった)、そして特に同年のアマーリア・ロージェの閉鎖が、ヴァイマルがStrikte Observanzのロージェの中心となろうとする企てを阻止してしまったのである。アマーリア・ロージェの閉鎖は、そのロージェに所属していたベルトゥフとボーデの間のイデオロギーを巡る論争が元で起こったと言われている。ボーデとベルトゥフの論争は、フライマウレライの意味と目的を問うものだった。従来のイギリスフリーメーソンの人間形成の場としての理念に比べ、ボーデの考えは、もっと革新的で左よりだった。ボー

デはフライマウラーの結社は、国家、社会、教会の改革のための道具として使われるべきだというハンブルク時代からの一貫した信念を主張した。そして、およそフライマウレイとは、彼にとっては、啓蒙主義を送り込み、絶対主義のシステムを克服するための手段であった。それにヴィルヘルムスパートの大会以前の1780年に彼はクニッゲの誘いにより、Illuminatenordenのメンバーになっていた。結社員名はAmeliusである。ボーデと彼の上司であるクニッゲ男爵はすでに1775年のブラウンシュヴァイクの大会で、Strikte Observanzの存続が難しいことを悟っていた。遡る1768年当時より、フント男爵は詐欺師シュタルク (Johann August von Starck, 1741-1816. ルター派の牧師の息子であり、表向きはプロテスタントに所属しているように振舞っていたが、実はカトリック教徒であることが後に判明する) が率いるテンプル騎士団の聖職者達 (Clerici Ordinis Templarii) という新たな集団の専横によって心身ともに疲弊させられた上、フント男爵自身も彼らによってカトリックに改宗させられ、1772年のコーロー (Kohlow) の大会で大棟梁職を辞任する。そして1775年のブラウンシュヴァイクの大会で影の上位者を明らかにし、テンプル騎士団系フライマウレイとしての系譜を明らかにするよう求められたが、はっきりとした解答をすることができず、それが原因で信用を失ってしまう。(フント男爵は山師の烙印を押されてしまったのであるが、近年の研究においては、彼の言っている内容にも正当性が認められるようになってきているようである。)<sup>17</sup>そして翌年、心労により死去する。フントが頼った存在だったシュタルクは、生前のフントの地位をしのぐ存在となり、Strikte Observanzの権力を自らに集中させていく。その際、彼はStrikte Observanzの完全なカトリック化を図ろうとした。従ってシュタルクは、Strikte Observanzを解体するためにイエズス会から派遣された者だった可能性が強いと言われている。彼は、儀礼の内容を全てカトリック化し、Strikte Observanzが本来の目的とする民主主義に基づく貴族社会の確立などは、全く望めない組織にしてしまったのである。それはまた、優れた国際情報ネットワークの特権を占有したいというカトリックの意思でもあったのだろう。フント男爵の後を継いだのはブラウンシュヴァイク公フェルディナントだったが、彼もはやドイツのフライマウレイの連合を維持しつづける力は持っていなかった。このことをボーデもクニッゲ男爵もよくわかっており、Strikte Observanzの組織をIlluminatenordenに接木する計画を進めていた。それをヴァイマルの兄弟達に行う決定的な時期が1782年のヴィヘルムスパートの大会だったのである。この大会においてStrikte Observanzが完全に消滅したわけではなかった。現に、フランス人ヴィレルモ (Jean-Baptiste Willermoz) が率いる聖都慈善騎士団<sup>18</sup>というカトリックの結社が、これをフランスに伝えることとなる。しかしドイツではもはやStrikte Observanzは無力だった。そのような中、Illuminatenordenはクニッゲ男爵とボーデによる広報活動によって1780年以降、帝国全土の領域に広がりつつあった。即ちヴィルヘルムスパートの大会以前に下準備がなされていたのである。そのようなわけで1782年はアマリア・ロージェの閉鎖にもかかわらず、ヴァイマルのフライマウラーの兄弟達は非公開の形でIlluminatenordenの集会に集うことになった。少なくとも22人の結社員の存在が確認でき、この新たな組織に参加していたのは全てがヴァイマルのフライマウラーというわけではなかったが、その中には重要人物がいたのである。ゲーテ、カール・アウグスト公、ヘルダー、ムゼウス、カール・アウグスト・ベッティガー (Böttiger)、医師フーフェラント (Christoph Wilhelm von Hufeland)<sup>19</sup>、彫刻家クラウアー (Klauer)、ヴィーラントの息子、ボーデとすぐに親友となることになるイエナの哲学者カール・レオンハルト・ラインホルト (Karl Leonhardt Reinhold)、さらにStrikte Observanzのフライマウラーであるフリッチュ、マーシャル、シャルト並びに政府の政治的重要人物であるクリスチャン・ゴットリープ・フォイクト (Christian Gottlieb Voigt) が挙げられる。ヴァイマルにおけるIlluminatenordenの活動は1783年から始まり、それからおよそ1787年中頃まで続いた (この時点で伝承の記録が打ち切られている)。公には1785年4月の時点でIlluminatenordenは休止状態にあり、歴史研究にとっては消滅したと見なされていた。しかし、ボーデは同結社を引き続き運営しており、当時、ヴァイマルの

Illuminatenordenを東ねていたのは、当然のことながらボーデであった。彼は1784年、イオニア管区長に就任している。イオニアとは、ベルリンとブランデンブルクを含むオーバーザクセンのことである。ボーデはヴァイマルでも管区長であり上司であり、本来的推進力となっていた。しかし注目しておかなければならないことは、Illuminatenordenのさまざまな活動の拠点は隣接したゴータに置かれており、ヴァイマルではなかったということである。ゴータのエルンスト公は組織の後援者であり、組織の創立者であるヴァイスハウプト(Adam Weishaupt<sup>20</sup>)を匿っていた。ヴァイスハウプトはヴァイマルに呼ばれることはなかった。その理由の一つにはIlluminatenordenの持つ危うい側面を、カール・アウグスト公やゲーテやヴィーラントのけい眼が射抜いていたということがあるのかもしれない。従ってヴァイマルでのIlluminatenordenの結社員達はゴータの本部の支部を担っていたに過ぎない形が作られていた。なお、ゴータの有名な結社員としては、一般民衆の啓蒙主義者であるルドルフ・ツァハリアス・ベッカー(Rudolf Zacharias Becker)<sup>21</sup>、シュールポルタン(Shulpfortan)の長であるヨハン・ゴットフリート・ガイスラー(Johann Gottfried Geißler)、ゴータのエルンスト公の親友であるクリスチャン・ゲオルク・フォン・ヘルモルト(Christian Georg von Helmolt)、後にミュンヘンアカデミーの秘書となり、*„Nekrologs der Deutschen“*の著者となるアドルフ・シュリヒテグロール(Adolf Schlichtegroll)がいる。ワイマルとゴータ以外での結社員としては、ベルリンのフリードリヒ・ニコライ、ビースター(Johann Erich Biester)<sup>22</sup>、マインツの選帝侯の助手で神聖ローマ帝国の代理宰相であるエアフルトのカール・テオドル・フォン・ダルベルク(Karl Theodor von Dalberg)<sup>23</sup>、ハンブルクの上院議員で当地のジャコバンクラブ(Jakobinerklub)の創設者となるゲオルク・ハインリヒ・ジーフェキング(Georg Heinrich Sieveking)、有名な俳優で歴史家であり、19世紀初頭のフライマウレライの改革者となったフリードリヒ・ルートヴィヒ・シュレーダー(Friedrich Ludwig Schröder)<sup>24</sup>などがいる。

次に、Illuminatenordenについて少し説明を加えたいと思う。Illuminatenordenはインゴールシュタットの教会法の教授であるヴァイスハウプトの案出によるものである。彼はルソーの理念の信奉者で、自由と平等こそ人類最高の財産であると考え、1776年にIlluminatenordenを創設したが、その目的は、人類が真の道徳性に達するような教育を実行することであった。1773年にローマ法王クレメンス14世<sup>25</sup>によってイエズス会が禁止されたが、それにもかかわらず、イエズス会の結社員達は学校という領域の大部分に潜り込んでいた。そのポストを短期間で新しいイエズス会の経歴のない人事で埋めることなどは到底、不可能だったので、全ては何も変わっていなかった。大学ではイエズス会の結社員達は、結社の法衣なしで相変わらず活動を続けていた。ヴァイスハウプトは、彼のIlluminatenordenをイエズス会の結社員達に対抗する機関として創立したと言われている。というのも、彼らをヴァイスハウプトは啓蒙主義の危険な敵と見なしていたからである。啓蒙主義を世に送り込むための手段と考えていたボーデにとって、この組織は打ってつけであった。その創立記念日である1776年5月1日はナチスによって国家の祝日とされた労働運動の闘争日と同じ日である。80年にクニッゲ男爵が参加するまでは、最初、この結社の活動はバイエルン、とりわけレジデンツシュタットのミュンヘンに限られていた。しかしヴァイスハウプトの息のかかった者達は短期間でミュンヘンの中枢部まで食い込むことに成功した。つまりIlluminatenordenの結社員達は、ほとんど全ての行政官庁の座を占めたのであった。検閲職員団は、完全に彼らによって占拠された。ヴィーラントは「世界市民結社の秘密」という論文の中で、報道検閲の機関の占拠を報道の自由を妨害する暴挙と断じ、ジャーナリスト的な視点からIlluminatenordenを弾劾している<sup>26</sup>。フント男爵が根本的に民主主義的基本形を伴った新たな独立した貴族国家を実現しようとしていたとすれば、ヴァイスハウプトの目的は現行の国家並びに社会の秩序に潜入し、革命をもたらすことができる人間を育成することだった。若い男子をいわゆるGeheime Weisheitsschule(ヴァイスハウプトの私的教育機関)で、彼らの将来の職業上社会上の活動において結社の意図する啓蒙主義を実践するように教育することだったのである。Illuminatenordenの位階、儀

式、教示において表現され、かつまた結社によって政治的社会的闘争へと変換される運命にある原理的哲学的立場はコンディアク (Condillac)、エルベシウス (Hervetius)、ドルバック (Holbach) といったフランス啓蒙主義者達に共鳴する過激で無神論的な唯物論であった。ヴァイスハウプトは最後の位階において最高の結社の指導書である結社システムの終わりを形作るDie Höhere Mysterienの中で首尾一貫して彼の思想を遂行した。かつてクニッゲ男爵は9つの位階からなる精緻な位階制度と儀礼の式次第をこの結社のために作ったが、ヴァイスハウプトが勝手に儀礼の内容や様式を変えてしまったことが原因で、1784年、ヴァイスハウプトのもとを去っていく。ヴァイスハウプトにとって位階や式次第の内容は彼の教育哲学の真髄だったのである。Strikte Observanzの位階が民主主義に基づく貴族社会が実現した暁の役職と位に相当していたとすれば、Illuminatenordenにおける位階というものは、教育カリキュラムそのものであった。1783年頃にできたこのDie Höhere Mysterienの中にその最終的教育カリキュラムを見ることができる。その内容はおおよそ次のようなものに集約されよう。即ちカントの「純粹理性批判」におけるTranszendentalen Ästhetikを批判し、また、一方で、実際の社会的政治的状況へ介入するための実践的動機を含む歴史哲学を唯物論的経験論的基盤の上で発展させようと試みるものである。伝統的な社会的国家的秩序の権威ならびに、その権限を過激に否定することに並んで、ヴァイスハウプトはエネルギーに発展していく歴史観を掲げつつ、原民主的家父長制に基づいて作られ、啓蒙化された理性国家を目指した。この際、この歴史のプロセスは、もっぱら人間の所産であって神の世界の創造としてはもはや理解されるものではなかった(当時、ヘーゲルもすでにヴァイスハウプトによって左寄りになっていた)。これは後の史的唯物論の先駆的思想を感じさせるものである。さらに支配する者とされる者の経済状況を取り上げてヴァイスハウプトの理論は利益社会的政治的公共的新秩序のための包括的計画として示される。圧倒的な経済的不平等は知的論理的自立の発展にとって障害であり、日常における専制と同義と見なされたのである。こうした考え方は、後にフィヒテ (Johann Gottlieb Fichte) の国家および法の学における中心となる思想である。貴族や聖職者達の専制を克服することは、この思想では必然なことではあるが、当時の歴史の流れの中では、まだささやかな動機を形作っているにすぎなかった。伝統的な秩序の分解、すなわち粉碎こそが、思想における一つの解決として意識的に付け加えられており、それはつまり暴力による革命である。ヴァイスハウプトの思想は決して非凡なものではなく(トーマス・ペイン (Thomas Paine) のコモンセンスやアメリカ独立革命)、1750年から1800年の間の哲学ならびに国家社会学の理論構築に見られることである。しかし理論上獲得された知識を、秘密裏に活動する結社によって実践へと変換することは新しいことであった。しかし、ミュンヘンを拠点としたIlluminatenordenの活動は政府から危険視され、バイエルン選帝侯のカール・テオドール<sup>27</sup>によって1784年6月22日に秘密結社の会合を禁止する勅令を發布したのに伴い、活動が極度に制限されることになったが、翌年の1785年3月2日にはIlluminatenordenを名指しして、その解散を命ずる勅令が交付され、歴史上はこの年の4月には活動が休止状態になったとされている。

1785年のヴァイマルのボーデに話を戻すと、当時、彼は閉鎖された多くの支部を稼動可能状態に戻すことに努力していた。1782年以来、ゴータ、イエナ、ルドルシュタット、エアフルト、マイニンゲン、ブトゥシュテット、ドレスデン、ライプツィヒ、ベルリン、ハンブルク、ブレーメン、リュューベック、アルトナ、シュターデでイルミナート結社の支部が誕生してきたが、それら全ての町の結社活動が85年に公式に禁止されて表面上は停止していたが、密に活動を続けていた。イオニア管区とボーデが引き継いだニーダーザクセンの管区の外側ではカールスルーエ、ブルッフザール、カッセルの支部が少なくとも1788年までは活動を続けていた。<sup>28</sup>しかし1785年、バイエルンからチューリンゲンのゴータへと結社の運営拠点が移った際、バイエルンでヴァイスハウプトに付き従っていた兄弟達は誰一人としてついてこなかった。1780年以来、クニッゲ男爵によって指導的立場にあった人達も、ここには

ほとんどいなかった。ボーデとヴァイスハウプトはゴータを新たな拠点として結社組織の再編に腐心していた。そのような多忙な中、Illuminatenordenがフランス革命勃発の伏線となるできごとが起こる。パリのロージェのレ・ザミ・レユニ (Les Amis Reunis)<sup>29</sup>からヴィルヘルムスバートで解決できなかったフライマウレイの出所、発生、目的を取り上げる大会を公示し、招待を呼びかけてきたのである。当時ボーデは結社再建に忙しく、85年の参加はならなかったが、同じレ・ザミ・レユニの誘いで1787年にもフライマウレイの大会が開催され、その折にはボーデはStrikte Observanzの高位代表者にしてIlluminatenordenの指導者として招かれた。パリのレ・ザミ・レユニは1783年以来、フィラレート派<sup>30</sup>の人達 (Philalethen) の組織が中心となり、純粋なフライマウレイ研究の機関を創設していた。そして反啓蒙主義と啓蒙主義を巡る闘争の中、80年代後半までに政治結社としての色彩を強めてきた結社である(後に革命勢力の溜まり場となっていく)。ところがこの年彼がパリに赴いた時には(7月だったのだが)、フィラレート派の会議はすでに終了していた。その理由はパリの中でのフィラレート派の内内の事件が原因だと言われているが、詳しいことはよくわかっていない。しかしながらボーデはレ・ザミ・レユニのフライマウラー達にヴァイスハウプトの理論を移植することに成功している。レ・ザミ・レユニのパリッ子である結社員達からフランス大東ロージェ (Großorient) のGroßmeisterであるルティエール・ド・モンタロー (Roettieres de Montaleau) ならびにフィラレート派の長であるサヴァレット・ド・ランジェ侯爵 (Savalette de Langes) がドイツのIlluminatenordenに加わったことは大きな収穫であった。ボーデがレ・ザミ・レユニにIlluminatenordenの理念を伝えてから2年後の1789年にフランス革命が勃発する(ミラボーやロバスピエール他、フランス革命の立役者がIlluminatenだったという説もあるのだが、ここではボーデがはっきりと理念を伝えた人だけを扱う)。ボーデの訪問以来、レ・ザミ・レユニとドイツのIlluminatenordenの間に親密な協力関係ができたが、その協力関係の記録は88年に中断されたというのが研究家の間での通説である。<sup>30</sup>パリから帰省した後、ボーデは共和制を目指す社会改革の発信基地としてIlluminatenordenと未だに統一されていないフライマウレイを融合しようと考えていた。彼は1790年にドイツフライマウレイ連合 (Bund der deutschen Freimaurerei) という名の下で、この計画に着手している。しかし、1793年12月13日のヴァイマルでのボーデの死によってこの計画は頓挫してしまう。しかし、ボーデの志を継ぐシュレーダー (Schróder)<sup>23</sup>によって19世紀初頭にハンブルクのロージェ改革という形で、この連合の準備段階が組織される。しかし、ヴァイマルではボーデの死以降、Strikte ObservanzとIlluminatenorden以来続いてきた高位階システムと縁を切り、イギリスの大ロッジに加わることで初心に戻る形で1808年にアマーリア・ロージェが再開される。そのGroßmeisterはアマーリア・ロージェ閉鎖の原因となったイデオロギー論争でボーデに反対したベルトッフだった。フライマウレイに対しては非常に用心深かったヴィーラントがこの年に入会したことからもわかるように、アマーリア・ロージェは人道主義的立場に立つ人間形成のための教育的世界市民結社に回帰したことを意味していると思われる。つまり、「初心忘るべからず」といったところだろう。

#### 4. 結語

以上のようにボーデがStrikte ObservanzとIlluminatenordenを通して行った活動は、革命志向という過激な側面もあったが、後の政治哲学に大きな影響を与えたと思われる。ヘーゲルの主人と奴隷の関係から導き出す弁証法的思考の連鎖は、まさに当時のボーデやヴァイスハウプトが目指した絶対主義から立憲君主制、さらにはそこから共和制へと昇華していくプロセスを哲学的に暗示するものであった。さらにはマルクスの上部構造は下部構造によって強い影響を受け支配されるものであるといった考え方は、ヴァイスハウプトのDie Höhere Mysterienの哲学に由来する歴史観を反映している。こうして考

えてみると18世紀のヴァイマルから、社会主義や共産主義の源流とも言える思想を発信するボーデの活動は、ドイツ文学史、ドイツ哲学史におけるだけでなく、政治思想史において少なからぬ影響を持つものであり、特に18世紀におけるドイツ文学と政治といった関係を立体的に解明する上で、非常に重要だと思われるのである。これだけドイツの歴史において重要なポジションを占めるボーデが、今まで日陰の存在であったのは、まさに秘密結社員としての面目躍如といったところであろうか。しかしながら、彼を日の当たるところに出すことによって18世紀のドイツ文学史を、今まで見えて来なかった新しい人間関係から見直すことができるのである。

#### 〔註〕

1) Knigge, Adolf Freiherr von (1752-1796) : 著述家。各地の宮廷に仕えながらStrikte Observanzと、Strikte Observanzが消滅した後はIlluminatenorden (啓明結社) の普及に努めた。1783年にヴァイマルにおいてゲーテがカール・アウグスト公とともにIlluminatenordenに入会したとき(ゲーテの会員名はアパリスである)、クニツゲはボーデと共に結社の指導的地位にあった。小説、戯曲、評論等多彩な活動をしたが、実用的な生活規範を取めた「人間交際論(1788)」が有名。

2) Fritsch, Jakob Friedrich von (1731-1814) : ヴァイマルで1772年より筆頭大臣として摂政アマリアを補佐した。ヴィーラントの招聘にケチをつけ、ゲーテの枢密院入りに強く反対した保守的な政治家だが、カール・アウグスト公は、その有能さに一目置いていたと言われる。1764年のヨンゾンスキャンダルでイエナのロージェ zu den drei Rosenが閉鎖されるまで、このロージェの指導的立場にあり、フライマウレライの造詣も深かった。

3) Karl August, Prinz (→Herzog, Großherzog) v. Sachsen-Weimar (1757-1828) : 父親が1758年に早世したことにより、母アンナ・アマリア公妃(フリードリヒ大王の姪)を摂政とし、ヴィーラントを師とした。1774年以来ゲーテと親交を結び、ゲーテ、シラー等多くの文人を招いてヴァイマルをドイツ文化の中心地とした。

4) Bahrdt, Karl Friedrich (1741-1792) : プロテスタントの合理主義的神学者、著述家。正統派に対する攻撃のために各地の大学を追われ、1779年にハレの教授となる。1798年にプロイセンの総理大臣ヴェルナーを諷した喜劇で投獄された。

5) Nicolai, Friedrich (1733-1811) : 作家、出版社、啓蒙主義者。レッシングやメンデルスゾーンと親交があった。啓蒙主義に基づく代表的な批評家。

6) Claudius, Matthias (1740-1815) : 詩人。1768年「ハンブルク新報知」、1771年から「ヴァンツバックの使者(1770-1775)」の編集者。クロップシュトック、レッシング、ヘルダーといった有力な協力者を得て、政治、学芸分野のニュースと教訓的記事からなる内容は多くの模倣を生んだ。庶民的素朴さとユーモアで際立った文体という点で、従来のもとは一線を画する。

7) Möser, Justus (1720-1794) : 歴史家。深い歴史的・政治的洞察を持った思想家で、ヘルダーやゲーテに大きな影響を及ぼした。ヘルダーの論文「ドイツの様式と芸術」に「ドイツの歴史」が収録されている。主な著作物に「愛国的幻想(Patriotische Phantasien)」(4巻、1774-1778)、「オスナブリュック史(Osnabrückische Geschichte)」(2巻、1768)がある。

8) Shardt, Ernst Karl Konstantin von (1744-1833) : イエナ大学で法律を修め、後にヴァイマルで私設秘書官となる。行政顧問官、地方財務顧問官(1798年)などを歴任。Strikte Observanzにおける結社員名はa Campana argentea、Illuminatenordenでの結社員名はApolloniusである。

9) Marschall, August Dietrich von (1750-1824) : ブラウンシュヴァイクで侍従を勤めていたが、1780年にアルテンベルク、さらにヴァイマルへ移る。ヘルダー夫妻と文学的問題を通じて親交を深める。Strikte Observanzにおける結社員名は、a Thymalo、Illuminatenordenでの結社員名はPhilostratusである。

10) Bertuch, Friedrich Justin (1747-1822) : ヴァイマル生まれの著述家、出版業者。「ドン・キホーテ」全6巻

の翻訳をした。„Journal des Luxus und der Moden“ という雑誌を刊行した。「イエナー一般新聞」の創始者の一人。ヴィーラントの「ドイツ・メルケール」を出版。

11) テンプル騎士団 (Tempelherren)：エルサレム巡礼者の保護を目的とし、1128年のトロワ公会議で公認された騎士団で、厳しい戒律のもとで異教徒を征討することを信条とした。教皇の特別の庇護を受け、多くの特権を得ていたため急速に勢力を増し、莫大な資産を得るに至った。白いマントと左胸に赤い十字架をつけた制服はレッシングの「賢者ナータン」にも登場する。1312年に教皇クレメンス5世により解散させられた。

12) 修正スコットランド儀礼 (the Rectified Scottish Rite)：位階制度の一種。厳格戒律派を創始したフント男爵が採用し、聖都慈善騎士団を結成したヴィレルモがフランスに広めた。現在では、フランス国民大ロージェだけがこの位階制度を採用している。6つの位階からなり、基本3位階の上に「スコットランドの聖アンデレの棟梁」「修練士」「テンプル騎士」の各上位階が置かれる他、補助位階がいくつかある。3つの上位位階は「聖アンデレのロッジ (Saint Andrew's lodge)」と呼ばれる上位ロッジを形成する。

13) Musäus, Johann Karl August (1735-1787)：詩人、小説家。グリム兄弟に先駆けてドイツ民話を取材し „Volksmärchen der Deutschen“ を編纂した。伝説や昔話を軽妙に再話した18世紀“個性メルヒェン”の作者。日本でも出版されている（「沈黙の恋」等）。1770年よりヴァイマルのGymnasialprofessorを勤める。

14) Strikte Observanzの大棟梁職をフントより引き継いだブラウンシュヴァイク公フェルディナントによってフライマウレライの本質、起源、沿革、目標、未来といった問題を本格的に討議するために招集された。Strikte Observanzがドイツにおいて完全に力を失い、Illuminatenordenに取って代わられる転換点となった。

15) テンプル騎士団起源説：フント男爵は、彼の著書である「厳格戒律派について」の中で、フリーメーソンの起源を次のように述べている。「テンプル騎士達が逮捕された後、オーヴェルニュ管区長ピエール・オーモンはスコットランドに逃れ、そこで他の逃亡騎士達と合流した。彼らは参事会を作り、オーモンが大総長に選ばれた。追っ手の目をくらすために、全員が石工（メーソン）の格好をした。」

16) ヘッセン・カッセル方伯カールの抗議：クニッゲ男爵は1771年、ヘッセン・カッセル方伯の侍従 (Hofjunker) 並びに有事および内政についての上級公務員の任につく。そして新大陸アメリカとイギリス本国の緊張感が高まる中、イギリスとハノーファーが同君主同盟を結ぶことにより、イギリスへの傭兵派遣に携わったりもしたので、クニッゲ男爵はヘッセン・カッセル方伯カールがイギリス寄りであることをよく知っていたと思われる。また、そのことを男爵の下で働くボーデもよく知っていたであろう。後にStrikte Observanzの本部がブラウンシュヴァイクからヴァイマルに移る話が出たとき、結社ナンバーツーに昇進したヘッセン・カッセル方伯カールが反対したが、ボーデはフライマウレライのネットワークを使ってドイツの覇権を狙うカールの腹の底が見えたことだろう。

17) vgl. マイケル・ベイジェント、リチャード・リー「テンプル騎士団とフリーメーソン」s.359

18) 聖都慈善騎士団：1778年にヴィレルモが招集したりヨンの大会で承認され、その後のヴィルヘルムスバートの大会でも承認された一派。Strikte Observanzの位階システムをそのまま採用したが、およそStrikte Observanzの活動とは異なり、オカルティズム的神智理論に向かう。フランス革命の余波により消滅する。

19) Hufeland, Christoph Wilhelm von (1762-1836)：ヴァイマルの医師。ベルリン大学教授でヴィルヘルム3世の侍医。衛生学に貢献し、「医学実理」は日本語にも翻訳された。

20) Weishaupt, Adam (1748-1830)：Illuminatenorden (啓明結社) の創設者。インゴールシュタットの教授 (1772-1785)。イエズス会およびフリーメーソンと敵対し、「啓明結社の弁明」「バイエルンにおける啓明結社迫害史」(1786) 等の著作がある。

21) Becker, Rudolf Zacharias (1752-1822)：著作家でいくつかの新聞を出版した。最も有名なのは「袖珍実用便覧 (1787-1797)」。

22) Biester, Johann Erich (1749-1816)：著述家。1783年以来「ベルリン月報 (Berlinische Monatsschrift)」を発行。その後、誌名を「ベルリン雑報 (Berliner Blätter, 1797-1798)」、「新ベルリン月報 (Neue Berliner Monatsschrift,

1799-1811)」として刊行した。

23) Dalberg, Karl Theodor Anton Maria von (1744-1817) : アウグスト王子の家庭教師としてアンナ・アマーリアにヴィーラントを推挙した。エアフルトの代官として知られた人物である。ヴァイマルのアマーリアのMusenhofに関係していたことから、ボーデとの関係が生まれた。イルミナートとしては、ヴォルムスの「Johannes zur brüderlichen Liebe」というロージェのMeister vom Stuhlであった。

24) Schröder, Friedrich Ludwig (1744-1826) : ゲーテやクリンガー、レンツの作品を上演しただけでなく、シェイクスピアの数々の劇をドイツの舞台のために翻訳して上演した。ドイツのフライマウラー連合の結成に尽力する。

25) Clemens XIV (1705-1774) : 1769-1774年教皇在位。欧州諸国と協調して教皇としての政治を行ったが、1773年諸国の圧力に屈してイエズス会を禁止した。

26) 飯塚信雄著「ヴィーラントの世界市民結社の秘密」に詳しい。

27) Karl Theodor, Kurfürst von der Pfalz (1724-1799) : 1742年即位後、学芸の振興に尽力し、マンハイムをヨーロッパ文化の中心地にしようと努めた。1757~1775年にかけて、マンハイムに造形美術アカデミー、科学アカデミー、ドイツ語協会を設立させた。1777年にミュンヘンに移住し、翌年バイエルン選帝侯となる。

28) Hermann Schüttler „Freimaurer in Weimar. Zum 200. Todestag von Johann Joachim Christoph Bode“ s.26

29) 18世紀後半にパリで精力的な活動を行った思弁的フリーメーソンのロッジ。革命勢力のたまり場となったことで名高い。1773年、思索部門をフィラレート派として独立させ、80年代の後半までには政治的結社としての様相を呈する。

30) レ・ザミ・レユニの上位ロッジとしてサヴァレット・ド・ランジェ公爵が1773年に創始し、12位階を擁するフィラレート位階を創出した。1788年の公爵の死去、及び翌年のフランス革命勃発に伴い活動停止になった。1787年にレ・ザミ・レユニの招きでパリを訪れたボーデは、公爵にIlluminatenordenの活動を伝えている。

31) さらに情報を提供できる資料は、革命のさなか処分されたり、目下のところ公開されていないのが現状だとIlluminatenorden研究家のHermann Schüttler氏は言う。

#### 〔参考文献〕

Hermann Schüttler „Freimaurerei in Weimar. Zum 200. Todestag von Johann Joachim Christoph Bode“, Etterburger Hefte 3, Weimar, 1995

Joachim Bauer-Gerhard Müller „Des Maurers Wandeln, es gleicht dem Leben“, Hain verlag, Rudolstadt & Jena, 2000

W. Daniel Wilson „Unterirdische Gänge, Goethe, Freimaurerei und Politik“, Göttingen, 1999

Eugen Lennhoff, Oscar Posner, Dieter A. Binder „Internationales Freimaurer Lexikon“, München, 2000

Arthur Edward Waite „A new encyclopedia of freemasonry“, Wings books, New York, 1970

ビーバーシュタイン 「ヨーロッパ反体制思想」, 公論社, 1976

赤間剛 「フリーメーソンの秘密」, 三一書房, 1983

マイケル・ベイジェント、リチャード・リー 「テンプル騎士団とフリーメーソン」, 三交社, 2006